
流星戦隊コスモマン

ゆとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星戦隊コスモマン

【Nコード】

N7221D

【作者名】

ゆとり

【あらすじ】

遙か銀河のなたに存在する宇宙を守る組織コスモガーディアン。そこからある日悪の組織デッドロンの4幹部が逃げ出す。コスモアイスは逃げ出した4幹部によって壊滅状態にされるが若き5人がデッドロンを追いかけて地球へと行く。しかし、その際隊長レイはやられ、地球人の煌川翔と戦うこととなる！

1st stage 宇宙からの来訪者（前編）（前書き）

やっと書けました。半年（そこまで長くないと思うけど・・・）くらい構想してた物です。まだまだ未熟ですがどうぞ！

1st stage 宇宙からの来訪者（前編）

地球より遠くはなれた銀河にそれは存在した。

宇宙警備隊コスモガーディアン、それは全宇宙を監視し悪事を働く惑星や宇宙海賊を取り締まり、全宇宙の安全と平和を守るために結成された組織である。

そのコスモガーディアンと長年敵対し、多くの惑星を滅亡させ自らの利益だけに動く組織デッドロン。

今この二つの勢力が地球を舞台に一人の地球人を巻き込んで熾烈な戦いを繰り広げる。

【流星戦隊コスモマン】

第78銀河系ペゼロス。そこにコスモガーディアンの本部基地コスモアースは存在する。中にはかつて重大な犯罪を起こした宇宙囚人

たちが監禁されている。

「はぁあゝ眠いな」

「まあそう言うなってこのランクSS囚人の部屋の見回りが終われば今日も終わりだって」

二人組みの警備員のような服装をした宇宙人達が自らの頭の触覚から出たライトで辺りを照らしながら歩いている。

「まあそうだけど・・・一日の終わりにSSだぜ？おかしいよ」

このコスモガーディアンでは捕まった宇宙囚人は犯罪者ランク別に分けられ監獄されていてC～SSまであり、SSは史上最悪の宇宙囚人たちの宝庫である。

「だよなゝ、まあパパとやって寝ようぜ!」

「おうよ!そうだな」

二人はカードキーでランクSSの囚人たちが眠る部屋を空けた。扉が開くと異様な寒気がする空気がぶわつと流れ込む。

今現在SSランクの部屋には4人の宇宙囚人が捕らえられている。

いつもは「ここからだせゝゝゝ!」とかうるさいはずだがいつもと違って今日は静かである。

「妙に静かだな・・・!!おいコレ!!」

片方の男が叫ぶ。

「え．．．アッ！！！！大変だあ！！」

そこには空っぽの4つの牢獄部屋があった。二人はすぐさま胸にある緊急用トランシーバーに手をかける。

「た．．．．大変です！！SSランクの囚人が脱走しま．．．ぐわああああ」

『どうした？A - 02？応答しろ！！繰り返す．．．』

警備員の二人は後ろからの何者かに一撃で殺されそのままトランシーバーごと壊された。

「く．．．うつさいなハエ2匹だな」

茶色い大型のライオンのような生物で、体の至る所に牙が生えている。彼こそSSランク囚人の一人元デッドロン幹部殺戮の獅子ヴァルガスである。

「それくらいにしときなさい．．．ヴァルガス」

赤いマントに身を包んだ女が天井からゆっくりと降りてきた。彼女こそSSランク主人の二人目元デッドロン幹部、終末女帝レイナである。

「おう、レイナ。早く行かんとデッドロン様が怒られてるだろうしな、バンドルとシャムンズはどうした？」

レイナは二つの死体を手から放ったビームで抹消させるとヴァルガスのように顔を向けた。

「バンドルは他の捕らえられた仲間達の冷凍保存に取りに、シャムンズはここから出るための戦艦を用意しに言ってるわ」

「そうか・・・ならこの辺でも破壊して時間潰すか」

そう言うのとヴァンガスはニヤリとして、雄たけびをあげるとコスモアースを破壊し始めた。

司令部には焦りが走っていた。すでに非常を知らず警報はさっきからうるさい音を上げて赤いランプを光らせながら唸っている。

「Bブロックから冷凍保存宇宙囚人がどんどん取られていってます
！！」

「対応に回っているD班全滅です！！」

オペレーターたちが忙しそうに現状を伝える。その現状に頭を抱えている人物がいる。

コスモガーディアン総司令官デルベットであった。地球人と似たような体系をしている男である。

「くう・・・防御扉も通用せんし・・・なら・・・」

デルベットは近くにあったボタンを押す。すると目の前に小さな女性科学者のホノグラフィが現れた。

『はい、どうなさいましたか？』

「シャムニット！！コスモアブネットスーツの調子はどうだ？！」

コスモアブネットスーツそれは、コスモガーディアンが開発した最新の戦闘スーツの事である。宇宙科学金属を粒子レベルまでに圧縮しそれを身にまとうことで基礎運動能力などが数段向上するスーツである。

現在は赤、青、黒、黄色、桃色の5色のタイプがほぼ完成状態に入っている。

『使おうと思えば使えます、司令』

デルベットは頷くと指をパチンと鳴らした。すると中年くらいの男性らしい格好をした宇宙人を中心に男性3人女性二人の宇宙人5人が現れた。

「ガーディアン最強部隊、スベーツナイツSN。君たちに任務を与える、今から新作スーツコスモアブネットスーツを装着してすぐに危険度SSの宇宙囚人を始末及び確保してくれ」

隊長らしき男が前に出た。

「了解しました。では、すぐに準備に移るので装着させてください」

「ではコレを使ってくれたまえ。コスモブレイザーだ」

そう言ってデルベットはSNの5人に青と銀色を主体としたプレス

を渡した。

5人は腕にそれをすぐに装着する。

「変身方法は中心部分の赤いボタンを押して『コスモチエンジャー』の掛け声でロックがはずれこの基地の科学技術室からコスモアブネットスーツが電子粒子として出てきて君たちのみを包んで変身できる」

5人は出るベットの話を聞いて目を合わせ頷くと構えた。

「『『『『『コスモチエンジャー!!』『』『』『』」

5人は赤いボタンを押してそう叫んだ。

コスモブレイザーからは小さな粒状の物が光を放ちながら5人を渦を巻きながら包んでいく。光が止むとそこには5人の戦士がいた。

「さあ、頼んだぞ!!SN!!」

「了解!!」
「ラジャー」

そう言つて5人は走つて司令部から去つた。

ヴァルガス、レイナ、シャムズ、バンドルの4人は既にそれぞれの目的を果たして以後はこのコスモアースからの脱出のみであった。

「さあて、そろそろこの忌々しいコスモアースから出ようぜ!!」

小柄で青い狼のような宇宙人である超悪星バンドルが大きく体を伸ばして3人に言った。

「ふ・・・忘れ物は無いわよね??あなたが一番心配なのよ」

レイナが嫌味っぽくバンドルに言う。

「うつさいな!!シャムンズもう大丈夫なの?」

全身黒いマントで身を隠したシャムンズと呼ばれる男に対してバンドルは大声で聞く。そう四天王の最後の一人破邪鬼シャムンズである。

「・・・ああ。メインエンジンとか全てチェックして問題は無い」

「さて帰ろうぜ」

ヴァルガスがニコニコ笑いながら言った後突如足元にビームが放たれた。

「ぬう?!誰だ・・・??」

「そこまで!!!!宇宙囚人!!!」

隊長格である男がデッドロン元4幹部に向かって叫ぶ。

「く・・・まだうつさいのが残ってたか、しかも何だあれ??」

「5色のへんなんだな……あれなんだよ」

5人はそんな事に聞く耳を持たず腰に装備されている銃に手を伸ばす。

「コスモガンナー!」

そう言つて引き金を引く。青白い銃からは無数の光線が放たれる。

「ぐおおお……なんだ?!」

「くう……」

元幹部たちは一回宙に飛ぶ。それを確認するとSNの5人も跳躍をする。

「うおおおお!!」

ヴァルガスはその大きな口から1万度の炎をSNの5人に向かって噴出す。

「うおおお……!!」

レッドに直撃してそのまま地面に直撃する。

「この……コスモランサー!!」

コスモガンナーは変形して短い刀となった。それを構えて突っ込むブルー。

「喰らえ！！！！ヴァルガス！！」

地面に落ちていったレッドを見つめていたヴァルガスには隙が出来ていた。

「ぐ……しまった！！」

「そうさせないわあ！！はあ！！」

レイナがグリーンの下から、ビームを目から放ちブルーを打ち落とす。

イエロー、ブラック、ピンクの3人もシャムンズの黒いマントから出る触手に掴まって身動きが出来ない状態であった。

「そろそろ終わりにさせてやろう！」

デルベツトは両腕に高エネルギーを集めていく、見る見るうちにエネルギーは膨張していく。

「喰らえ！！デススマッシュア！！！！」

一気に両腕を前に突き出すとエネルギー波が発生しSNの5人を包み込んだ。

光がやむとそこにはSNの制服、コスモブレイザーそれと、砂が残されていた。

「っけ。大した事無かったな！」

砂に向かってつばを吐き出すヴァルガス。

「まあ……とりあえず行こうとしようかね」

バンドルが笑顔で言う。

「ええ………“地球”へね……」

そうレイナが言うと4人は宇宙船へと乗り込んだ。

1st stage 宇宙からの来訪者（中編）

東京都新宿区。まだ昼ごろなので当たり前のように人は多くいる。

ランチ時なのでいつもの店に行くOL連れや、サラリーマン。何しに来てるかわからない人。流行の姿をした若者。などいろいろである。

そんな中一人の青年がいる。見た感じは大学生である。

「ふう……今日も駄目だったな……」

就職活動中の青年煌川翔である。2流大学に通う普通の大学生で来年には就職を控えている。

特に将来やりたい事も無くとりあえず片っ端から会社に出向かっているのであるが全く手ごたえが無く少し不安を感じている。

「……ん??」

それをたまたま見上げるとそこには次元の歪みが発生していた。黒いものが渦巻いて見る見るうちに太陽は隠され昼と言うのに暗黒に包まれた。

「な……何が起きるんだ……?」

翔は都心部の方へ向かって走り出した。

「コスモシップほぼ壊滅です・・・・・・・・・・」

「何て事なんだ・・・・・・・・頼みのSNまでもが・・・・・・・・」

デルベットは椅子に深く腰をかけた。コスモガーディアン始まって史上最悪の状況である。

4人のSSランク囚人を捕まえるのに約1世紀はかった。その努力がただ一瞬のひと時だけで水の泡になるのである。

「・・・・・・・・なんとかせねば・・・・・・・・コスモガーディアンに残ってる部隊はあるのか？」

出るベットがオペレーターに声をかける。オペレーターはすぐにタイピングをしながら目を凝らし残りの部隊を探す。

オペレーターが検索を終わり出るベットの方が向くがその表情は少し不安そうであった。

「一部隊だけ残ってました・・・・・・・・」

「何処の部隊だ？」

「新人だけの部隊であるSA班です」

デルベットはそれを聞いて目を丸くしてしまった。

「本当にその部隊しか残ってないのか・・・？その部隊はリーダーですら3年目他の隊員は今年入隊したばかりじゃないか！」

「でもコレが現状です……………」

「しかし…………隊長のレイ君なら、あの戦闘能力だ・・・きっと何とかしてくれるだろう」

デルベットはそう言うレイたちSA班を自らの前に呼び出した。

しばらくして5人の若い青年達が不安そうな表情でデルベットの前に現れた。

「総司令……………なんでしょうか？」

SA班隊長であるレイは出るベットに対しそう問う。

「ウム。先ほどのSS級衆人が逃げ出したのは知っているであろうな」

5人は頷く。

すると緑色の頭髮の少年が手を挙げる。

「ちょ…………いいすか…………そのもしかしてですけど……………」

「ああ。そのもしかしてだ。君たちにはこれから奴らデッドロンを追いかけて欲しい」

デルベットのその言葉に全員が硬直する。

「ちょ……俺立ちまだ入隊して1年経つか経たないかですよ？」

する遠くの奥から戦闘指揮官であるジンが現れた。5人はそれに気付くと敬礼をする。

「手を下ろしてくれたまえ」

5人はその言葉と同時に手を下ろす。

「確かに君たちはまだ未熟なところがある」

ジンは5人の前を歩きながら5人について語る。

「だが。君たちの潜在能力の高さは確かだ、奴らとの戦闘できっと成長するであろう」

ジンはそう言つとデルベットのほうを向いて頷く。デルベットはそれを見ると口を開いた。

「と言うわけだ。なので君達にコレを片手に地球へ言つて欲しい」

デルベットはそう言つて5つのコスモブレイザーを差し出した。

「これは……？」

レイが腕に着けながらデルベットに聞く。

「コスモブレイザー……先ほどようやく完全完成した。我々コス

モガーディアンの最新計画コスモマンプロジェクトの一つだ、それを装着した状態で変身キーワード『コスモチェンジャー』の掛け声で最強の戦士コスモマンへと変身できる」

デルベットの説明を聞きながら5人はコスモブレイザーを見る。

「すげ……俺ら最新兵器身につけてるのかよ……」

隊員の一人である最年少のロウは目を輝かせてコスモブレイザーを見る。

「……わかりましたSA班。地球へ向かいます」

レイは強気の表情でデルベットに言った。すると急にホログラフィのシャムニットが現れた。

「なら、5人にとっておきのものがあるからすぐに第3ブロックに来て頂戴」

そう言われたので5人は第3ブロックへ向かった。

第3ブロックに着くと5人の目の前にはまだ完成したばかりの5機の真新しい宇宙戦闘機があった。

「これは……?」

隊員の一人シンは不思議そうに5機の宇宙戦闘機を見た。

「これらは、あなたたちの専用新型宇宙戦闘機コスモジェット左から1〜5よ」

奥からシャムニットが現れそう言った。

「コスモジェット・・・」

レイはただただ最新兵器の勇猛な姿を見ることしか出来なかった。

「操作方法は変身したら自動的に脳に伝達するようになってるわ。発進準備もできてるわ」

シャムニットの言葉を聞き5人は顔を見合わせ頷いた。

「『『『『『コスモチェンジャー！！！！』』』』」

5人は変身コードを叫びながら赤いボタンを押した。粒子状になったコスモアブネットスーツが射出され5人を包んでいく。

変身が完了するとすぐにレイは1、シンは2、ロウは3、女性隊員であるララとミウはそれぞれ4、5のコスモジェットに乗り込んだ。

「発進口開いて！！！」

シャムニットが叫ぶと前方の大きな扉が開き、目の前に綺麗な蒼い宇宙が広がっていた。

「準備はいいかしら？」

シャムニットの問いかけにレイはふと微笑むと返答した。

「いつでもどつぞ」と。

すると5機は勢い良くジェット噴射をして広大な宇宙へ飛び出した。

地球では翔が一人暗黒の渦の近くに立つて呆然とその光景を見ていた。

雷鳴が轟き、空が荒れて静かにだが何かはわからないが轟音がしていた。

「何が起ころうとしているんだ……?」

近くを見ればこの異常事態である当然マスコミも大きなカメラを片手に黒い渦を撮っていた。

自衛隊もこの異常事態にあわせ空軍が近くまで行き偵察をしているようだ。

そして次に瞬間であった。バリバリと言う音を立て黒い渦から大きな黒い物体がゆったりと姿を現した。

何かの戦艦の様であるがそれは確実に生きていた。呻き声を上げながら岩のように薄い緑色のような殻を徐々に出していくそれはこの世のものとは思えなかった。

「何なんだ今日は……？厄日だったか……？」

翔はそんな事を言いながらそれをみていた。

その戦艦の様な物こそが、宇宙最凶最悪のデッドロンの機動要塞生物ベボロイスであった。

ベボロイスは上空に現れるとしばらくそのまま動かなかった。

それを見て自衛隊はすぐさま戦闘機を発進させたらしく翔の後方から4機くらいの戦闘機が騒音を立ててこちらに向かってきていた。

「……………自衛隊が動いたのか……………」

翔はそれを見て少しほっとしたがそれはつかの間の出来事であった。自衛隊がすぐにミサイル攻撃をするとミサイルはベボロイスに吸収されそれどころから機の戦闘機さえもあつという間に吸収してしまったのであつた。

「な……………?!なんだよそれ……………」

翔は眉間にしわを寄せてただただベボロイスを見ることしか出来なかった。するとベボロイスは口から光線をビル街に向けて突如発射した。

無論ビルは砂埃を上げて崩れ落ちていく。人々はすぐさま逃げ惑う。しかし、翔は逃げなかった。いや、本当のところを言うと彼は逃げたかった、だが何かが彼をその場に残していた。

次の瞬間ベボロイスの一部分に爆発が起きた。翔はそれを見る。するとそこには5機の見慣れない戦闘機が青い時空の歪みから表れてベボロイスを攻撃していた。

「また・・・何か現れた」

翔は突如現れた5機の戦闘機に再び不安を募らせた。

「やっと追いついたか・・・・・・・・」

シンはコスモジェット2のコクピットからベボロイスを見てそう言った。

「デカいんだな・・・こいつ倒せんのか?」

ロウは少し不安そうに呟く。

「倒せるのかじゃない・・・倒すしかないんだ・・・宇宙の平和のために!!」

レイはそう言ってレバーのボタンを押した。それと同時にコスモジェット1の先頭部分の銃口からビームが放たれる。

それはベボロイスに直撃していたる部分で爆発が起こる。シンたち4人もレイに負けじと攻撃を開始する。

『グギャアアアアアア．．．．．!!!!』

ベボロイスは呻き声をあげもがき苦しみはじめ攻撃をやめた。

ベボロイス内部ではこの状況に脱走した4人の幹部は渋い表情をしていた。

「まさか．．．．．コスモガーディアンにあんな物があつたなんてね．．．．．」

レイナは画面を見ながらそう呟いた。

「まあ．．．そう簡単にこのベボロイスは落ちねえよ!」

ヴァルガスは牙を出してニヘニヘと笑っていて案外余裕そうであった。

「で．．．．．どうする．．．．．?新幹部である宇宙騎士．．．」

と、デルベットが言おうとすると4人の幹部の近くにいた一人の蒼いよろいで包んだ男が腰に装備していた剣をすぐに抜刀してデルベットの首元の方へ向けた。

「．．．．俺を呼ぶときは“その名”では無く、グラリスと呼べ．．．」

「わ．．．．悪かったよ．．．．グラリス．．．．」

デルベットがそう言うとグラリスはゆっくりと剣を元に戻した。

「…………俺が何とかしてくる」

そう言っただけでグリスは4人の目の前からゆっくりと去った。

「…………なんか気に食わないんだよね…………あの青い戦士さん」

デルベットが頬を右の人差し指でポリポリと掻きながら言った。

ベボロイスの攻撃をかわしながら着実に5機のコスモジェットは攻撃をしていた。

「わあ凄い私たち…………あんな化け物に太刀打ちできてるなんて…………」

ララは少し手を震わせて言った。

「ララちゃん、今は戦闘に集中しないと駄目よ…………こいつを倒してから一杯お話しよう。」

「そうね…………ミウちゃん！」

「み…………ミウちゃん…………」

そんな事をいいながらミウとララはフォーメーションを組み攻撃していた。

一方コスモジェット1に搭乗しているレイは上手く相手の攻撃を避けながらビーム砲を撃っていた。

（コレなら何とかなる・・・！俺たちがこの星を救える！！）

レイはそう思うだけで体の中から何か熱くなれる気がしていた。だが、彼のその一瞬の甘さが命取りとなった。

「・・・・・・・・もらった」

ベボロイスの屋上からコスモジェット1を見ていたグラリスは一気にコスモジェット1の方へ飛んだ。滞空中に剣を抜き構える。

「・・・・・・・・！！」

レイは気付きビーム砲を撃つが、グラリスは剣でそれをはじいていく。

「終わりだ！朱雀一文字斬り！！」

グラリスは一気にコスモジェット1の右翼を斬りつけた。右翼は爆発してコスモジェット1はバランスを失い地上へ向かって落下を始めた。

1st stage 宇宙からの来訪者（後編）

緊急事態を知らせる警報がコックピット内でうるさく鳴り響いている。

「くそお……！甘かった……」

レイは脱出用の緊急システムのボタンを探した。

「……あつた！」

レイはそのボタンを押す。しかしシステムは作動しない。

「……？！もう一度」

しかし作動はしない。目の前の画面を見るとERRORの文字が赤く浮かんでいる。

「そ……そんな！！俺は……死ぬのか……！？」

次の瞬間であったコスモジェット1は轟音を上げて地面に衝突した。黒煙が上がってる。

「コスモジェット1が！！」

ロウが真っ先に気付いた。ロウはコスモジェット3を自動操縦モードにさせると脱出装置で地面に降りた。

他の3人も気づき次々と地面に降りていく。

「隊長！！隊長大丈夫ですか！！」

4人は瓦礫となったコスモジェット1の破片をどけながらレイを探す。

「大丈夫ですか？！」

するとそんな事を言いながら一人の青年が現れた。

「さっき何か戦闘機みたいなものが墜落してきたような……
??あなた達は……？」

青年は不思議そうにコスモアブネットスーツを着用したコスモマンの4人を見ていた。

「私たちはその……」

ミウは説明に困っていた。

「私たちは宇宙人で宇宙の平和を守るコスモガーディアンだよ！」

ララが単刀直入に言ってしまった。

「ラ……ララ！！」

シンがララの元へ寄る。

「他の惑星で軽々しくコスモガーディアンを名乗ってはいけなく
とになってるではないか!!」

青年は全く訳側から無そうにシンや、ララ、ミウ、ロウ達のやり取
りを見ていた。

「と……とりあえずあんたたちは宇宙人って訳ですか……
？」

青年が聞くと4人は少し困った顔をしながら頷いた。

「……!!そうだそれよりも隊長を!!」

ロウが言つと3人も気付いたように瓦礫をどかし始めた。

青年もとりあえず小さな自分でもどかせそうな瓦礫とかをどけ始め
た。

しばらくして、人の手を青年は見つけた。

「あの……人がここにいます!!」

青年が言つとミウが気付いた。

「本当?!今行くわ!!」

ミウが一気に瓦礫をどかす。そこには緑の地を大量に出血していた

金髪の男、レイが倒れていた。

「た．．．．隊長！！」

レイは目を閉じたまま動かない。

「そんな．．．。隊長．．．」

ミウは変身を解きレイを見た、3人も変身を解き現れた。

「隊長．．．」

シンが歩み寄る。しかし先ほどと同じで動かなかった。

「．．．．レイ．．．隊長．．．」

ララがそう言うときレイは何故かゆっくりであるが目を開き意識を取り戻した。

「．．．．お．．．俺は．．．」

「隊長！！」

レイは閉じそうな目を必死に開きながら全員を見た。

「ふ．．．．どうや．．．ら．．．おれは．．．．もう．．．
だめ．．．らしい．．．」

青年と4人を見ながら話を続ける。

「おれ．．．が．．．しん．．．でも．おまえら．．．4
にんと．．．君」

青年は驚いたようにレイを見る。

「お．．．俺ですか」

「ああ．．．きみ．．．だ．．．
煌川翔君きらかわしょう」

「俺の名を何故．．．？」

そう言うとレイはふつと笑った。

「わから．．．ない．．．そし．．．てこれを．．．」

レイは右腕からコスモブレイザーを取り翔に差し出した。

翔はいきなりの展開に困っていた。さつき街中を歩いていれば何か変なものが出てきて、そのまま近づいてみれば宇宙人と出会って、変なものを差し出されて．．．。

「コレは何に使うんですか．．．？」

翔が5人に聞く。するとミウが答えた。

「それは、コスモガーディアン^①の対宇宙囚人新兵器コスモブレイザーよ。それを使う事でコスモマンと言う戦士に変身する事が出来るの」

「こ．．．コスモマン？」

翔の問いかけに次はシンが答える。

「ああ、そのコスモマンは今上空でもがいている空中要塞生物を拠点に宇宙を荒らしているデッドロンと戦う兵器なのだ」

「デッドロン……要するに俺はそのデッドロンとあなたたちと共に戦えと？」

レイは頷く。

「すまないと……おもって……いる。しか……し……きみ……しかないんだ……」

レイは一回間を置くと翔を力強く見た。

「頼む……！」

「む……無理ですよそんなの……」

翔は下を向きながら行った。

「何で俺なんすか？俺ただの就職活動控えてる大学生ですよ！自衛隊とか戦闘のプロに頼めばいいじゃないですか？！」

翔が言う。しかしレイは首を振る。

「きみ……しか……だめ……なんだ」

翔は戸惑う。

「意味わからねえ……なんなんだよ……これ」

そう翔が言った後だった。上空から無数の光弾が翔達6人を狙うように地面に撃たれた。

「うわあー!!」

全員がその場から離れる。

「ちい……デッドロンがまた攻めてきたか!!」

6人の目の前にはC級囚人であるデルン星人30〜40体近くの軍団が近づいてくる。

「あれは……?」

翔が聞く。

「デッドロンの兵隊みたいな宇宙囚人グレンド星人だ。知能が無くただただ戦闘しか出来ない星人でよく兵隊として使われるんだ……」

ロウが説明をした。

「どうやら……戦うしかないようだ……!」

シン、ロウ、ララ、ミウの4人が前に出る。

翔はただ自分の右手の中にあるコスモブレイザーを見ることしか出

来ない。

「行くぞ!!」

シンの掛け声に3人が「オウ!」と返事をする。

「コスモチェンジャー!!!!!!」

全員がコスモブレイザー中心の赤いボタンを押した。4人は光に包まれていった。

c o n t i n u e d

T
o
b
e

1st stage 宇宙からの来訪者（後編）（後書き）

次回予告

とうとうコスモマンとデッドロンによる戦いの火蓋が切って落とされた。

しかし、その戦いに対し自分はどうすべきかわからない煌川翔。

果たして彼は……？

次回 流星戦隊コスモマン 2nd stage 煌川翔

作者コメント。

はい。何とか1話投稿出来ました。
未熟です。おもしろくないかもしれませんが。
でもおもしろくしてみせます！

2nd stage 煌川翔（前編）（前書き）

ハイ2話目です。まだ主人公は変身してません。スイマセンく
| |) >

2nd stage 煌川翔（前編）

「コスモチエンジャー！！」

4人はそう叫ぶと共に光に包まれていった。

光が止むとそこには先ほどのように特殊なスーツを身にまとった4人が立っていた。

「よし！！行くぞ！！」

「おお！！」

シンの掛け声に3人は答え迫り来る敵に向かって走っていった。

「あいつら・・・本当になんなんだよ・・・」

翔はただただ4人を見てそうしか言えなかった。

それよりも今自分が置かれている状況についてさえも理解ができていなかった。さっきまで普通に待ちの中を、ぶらぶらしていただけであるのに。

「うう・・・」

すると自分の足元で横たわっているレイが苦しそうに呻いていた。

「だ……大丈夫ですか……？」

とりあえずレイに対し翔は心配そうに声をかける。

「……だい……じょうぶだ……」

明らかに大丈夫ではなかった。凄く苦しそうにしている。さっきから傷からの出血が止まらないし、ドンドンと衰弱していくのが翔にもわかるくらいだった。

「何とかしないと……と……とりあえずここから離れなければ……」

翔はレイの片手を掴み自分の肩に回させると身体を持ち上げて安全なところへ歩いていった。

「コスモガンナー!!」

ララ、ミウは二人で腰のホルスターから万能銃コスモガンナーを走りながら取り出す。

「いつけ……!!」

ララはそう言っで勢い良くトリガーを引く。銃口からは無数の光線が兵士に向かって放たれる。

「ちょっと撃ちすぎ……まあいつか……」

ミウは少し溜息をつきながら上に跳躍して敵の中心に入った。

「さあ！私の地獄のフルコースあなたたちに味あわせてあげるわ！！！」

ミウはコスモガンナーをコスモランサーに変えて相手に切りかかっていった。

「ぐあああ！！！」

口ウは勢い良く壁に叩きつけられた。相手に思いっきり吹っ飛ばされたらしく壁にひびが入っていた。

「クソ！油断しすぎた…………でも、負けるわけには行かない…………！！！」

コスモランサーをコスモガンナーに変えて床にはいつくばったまま撃って相手をひるませてる間に立ち上がった。

「俺は…………負けない…………！！レイ隊長の仇だ…………！！！」

「ふん！おりゃあ！！！」

シンはどんどん相手を切り倒していく。どう見ても不利な状況であるが、全くそんな感じを見せずに攻撃していく。

するとシンの元に3人が来た。

「こりゃあ……きりが無い……」

ロウが少し疲労を見せた感じに息を切らしながら言う。

「ええ……倒しても倒してもまだいるからね……」

ミウがロウに対して言う。

「でもお……倒さないといけないんだよね？ 私たちはコスモガ
ーディアンだから」

ララの言葉にシンは少し鼻で笑うと「ああ、そうだ」と答えた。

「さあ……なんとかしない……ぐわああ!!」

いきなり4人の元に無数の光線が放たれてきた。4人は爆発と共に
吹っ飛ぶ。

「な……なんだ……?」

シンが前を見る。そこには黒い鎧で全身をまとった騎士がいた。

「あ……あれは……レイ隊長のコスモジェット1を斬った
デッドロンの奴だ……!」

ロウが叫ぶ。

「なんで……ここに……?」

ミウが言う。

「アイツもデッドロンだ……倒すぞ！」

そう言ってシンは立ち上がりコスモランサーを握り走って向かって言った。

『フ……愚かな……』

黒い鎧の戦士は静かに笑うと真に向かって自らの剣を構えて歩みながら迎えた。

「とりあえず……処置は済んだ……」

翔は袖で額を拭った。翔はその辺の避難して無人となった薬局から適当に薬品などをもってきて書誌をしたので、レイの出血は大分止まった。

「すまない……」

レイは今にも閉じそうな目を必死に開けて翔を見ながら言う。翔は笑顔で首を横に振る。

「別に大したことじゃないですよ！……それよりもあいつらはなんなんですか？……その・デッドロンとか奴……」

翔の言葉にレイは一回天井を見て一息ついてから話し始めた。

「ああ．．．．．奴らは．．．宇宙を．．．．．破滅へと．．．．．導くための存在なんだ」

「宇宙を破滅．．．．．」

「ああ．．．．．そうだ、．．．．．そして．．．俺たちはそれを．．．．．防ぐための．．．．．組織．．．．．コスモガーディアン．．．．．なんだ」

「そ．．．．．そうだったんですか」

翔はとてつもなく大きなスケールの話に驚いていた。地球外にはこんな発展した科学があり、宇宙単位で存亡を懸けた戦いが、行われていたのである。

するとレイが話を続けた。

「そして．．．この星で言う1世紀前くらいか．．．デッドロンの主要4幹部．．．を捕まえる事に成功したんだ．．．．．」

「それならもう大丈夫なんじゃ」

レイは翔の言葉に首を横に振る。

「しかし、昨日くらいか．．．．．奴らは．．．．．コスモガーディアンの本拠地コスモアースから．．．．．逃げ出して．．．地球へ逃亡を図ったんだ．．．．．」

「そんな．．．．．」

「コスモガーディアンは．．．．．4幹部の脱走でかなりの痛手を喰らい．．．主力部隊はほぼ壊滅．．．俺たちの部隊しか．．．まともに動けなかった．．．．．」

「それであなたたちが．．．地球ヘッドロンを倒しに来たと言っわけですね．．．．．？」

翔の言葉にレイは頷いた。

「だが．．．俺のこの有様．．．．．もう．．．命は短い．．．しかも．．．戦えないだろう．．．．．」

レイの目からは少し涙が溢れ彼の頬をすーっと流れていた。

「レイさん．．．．．」

「すまないな．．．．．翔君．．．．俺たちが地球を守らなければならぬのに．．．．．」

翔は首を横に振った。

「あなたは立派でした．．．．．だから．．．もう休んで大丈夫です．．．．．」

翔はそう言って一息ついて表情を変えてレイに言い放った。

「あなたの代わりに．．．．．僕が．．．．僕が．．．．デッドロ
ンと戦います！ー！」

2nd stage 煌川翔（中編）

「ぐああああ．．．！！！！」

シンは壁に叩きつけられた。あまりの衝撃にシンはもがき苦しむ。

「シンさん！！．．．くそお．．．！！！！」

ロウがコスモガンナーを撃ちながら黒い鎧の戦士に駆け寄る。

『ふ．．．．．無駄だ．．．．．！！』

黒い鎧の戦士は手にエネルギーをためて一気にロウに向かって放つ。

それは見事にロウに直撃知ってロウの身体は衝撃のためシンみたいに吹っ飛ばされた。

「どうしろってんだ．．．．．」

ロウはその場で思わず倒れてしまう。周りを見るとすでにララ、ミウまでも倒れていた。

そう黒い鎧の戦士一人に4人はやられてしまったのである。

『どうした．．．．．コスモガーディアン．．．．．そんなものだったのか．．．．．』

黒い鎧の戦士はそんな事を言いながら静かに笑った。

「君が……戦ってくれるのか……?」

レイは驚いた表情で翔を見た。翔は力強く頷く。

「ここまで聞いというて何もするわけにはいかないですよ!」

翔は先ほど受け取ったコスモブレイザーを再び腕につけて笑顔で言う。

「だが……君は……戦いを出来るのか……?」

翔はフーツと息をつくと立ち上がって柔軟をして見せた。

「まあ……一応格闘技とかしてたんですよ……まあ……空手ですけどね……」

「民間人の君に……任せていいのか……?」

レイは言う。

「さつきも言っただじゃないですか!ここまで来たらもう後には引けないですよ。やってみせますよ!俺たちの大事な地球を悪の手にやるもんか!」

「すまない……」

「謝らないで下さいよ……じゃあさつきの所に戻ります!ここで待っててくださいね!」

「・・・・・・・・ああ」

翔が駆け出そうとしたときであった。

「ちょっと待ってくれ！」

レイが翔を呼び止めた。翔が振り向く。

「どうしましたか？」

レイは自分のポケットからごそごそと何かを取り出した。

「一回しか使えないが、クレト又星の石で、傷を癒せる。多分あの4人のことだから結構傷ついていると思うから・・・・・・・・」

翔は石を受け取ると笑みを浮かべてちゃんとポケットに入れた。

「じゃあいつてきます」

翔はそう言ってもとの場所へと向かって走り出した。

「頼んだぞ・・・・・・・・翔君・・・・・・・・」

レイは翔が去るのを確認すると静かに目を閉じた。

「うあああああ・・・・・・・・・・！」

爆発と共に4人はぶっ飛んで地面に叩きつけられる。その衝撃で変身が解けてしまった。

「あ・・・あああああ!!」

ロウが地面に倒れたまま呻いている。体中が痛んでいるようである。

「くう・・・強い・・・」

元の姿に戻った4人は何とか立ち上がるもののもう既に戦うほどの力がなさそうだ。

「どうすりゃあいいのよ・・・」

ミウが言う。

「これって・・・絶体絶命って奴？」

ララが言う。

「だな・・・」

シンが言う。

『お喋りはおしまいだ・・・消えろ!!!!』

4人に向かって黒い鎧の騎士が手からエネルギー波を放とうとした時であった。

「うおおおおおおおおお!!!!」

翔が黒い鎧の騎士に横からとび蹴りをして吹っ飛ばしたのであった。

「皆！大丈夫か？！」

翔が言つと全員は驚いた表情で近づいてきた。

「君はさっきの……」

ミウが言う。

「ええ、あ！そうだコレを使ってくれて！」

翔はレイから受け取った石を渡した。

「これは……」

ロウが受け取って言う。

「なんか傷が治るとか何とか……わ！」

すると石は一瞬光つてすぐに砂と化した。だが、全員は大分傷が無くなり体力が戻っていた。

「クレト又星の石か……ありがとう……えっと……」

シンが翔に聞く。

「俺は煌川翔！翔って呼んでくれ！」

翔が言う後ろで先ほど倒された黒い鎧の騎士が立ち上がった。

『く……油断したか……』

黒い鎧の騎士は5人の前に再び立ち上がる。5人はそれに負けじと並び立つ。

「5人揃った今俺たちは強いぜ！」

翔が言う。

「行くぞー!!」

翔が叫ぶ。

「……おお!」

「……コスモチエンジャー!!」

5人は掛け声と共にコスモチエンジャーの赤いボタンを押して光に包まれ変身をした。

そして、光が止むと共にそこには5人の戦士が立っていた。

『き……貴様ら……』

黒い鎧の騎士が5人の前に立ち上がる。それに負けじと翔達5人も立ち上がる。

「赤き炎の星の戦士! マーズレッド!」

「蒼き水の星の戦士！ マーキュリーブルー！」

「黒き大地の星の戦士！ サターンブラック！」

「黄色の光の星の戦士！ ビーナスイエロー！」

「桃色の愛の星の戦士！ プルートピンク！」

「邪悪な宇宙の悪を排除する宇宙に煌く五つ星！流星戦隊！」

5人がポーズを取り叫ぶ。

「『『『『『コスモマン！』『』『』『』』』』』」

『コスモ……マン……！……！……！』

黒い鎧の騎士は手から球を投げるとそこから先ほどのような兵士で級囚人グレンド星人がまた現れた。

「皆行くぞ！」

「おおっし！」

翔の呼びかけに全員は武器を構えてグレンド星人の集団の中心へ駆け出した。

2nd stage 煌川翔（後編）

「うおおおおおおー!!」

翔はコスモガンナーで次々とグレンド星人を打ち抜いて倒していく。すると背後からグレンド星人が一体手に持ったこん棒で、翔を殴りかかるうとした。

「甘い!!」

翔はそれに気付いていた。上手くかわすと右エルボーで頭部を殴ると蹴り飛ばした。

「まだまだ!!」

翔はコスモランサーにしてグレンド星人達に向かって切りかかった。

「はあ!!」

コスモランサーを使いながら1体、また1体と確実にシンはグレンド星人を倒していく。

「負けない!!俺は負けない!!」

空中に飛ぶとシンに襲い掛かるうとしていたグレンド星人2体がぶつかって後ろによるめくすかさずシンが空中で蹴り飛ばし後ろのグレンド星人に打撃を食らわす。

「コスモガンナー！」

次にコスモガンナーで遠くのグレンド星人を打ち抜いた。シンは空中に飛びまた違う集団の中心に立った。

「行くぞ！デッドロンー！」

シンはコスモランサーにコスモガンナーを変えてグレンド星人と戦いを再開した。

「おおっと！」

ロウはギリギリのところでグレンド星人のこん棒による攻撃を避けた。グレンド星人は再びロウに攻撃する。しかしロウはそれを手で止める。

「そう2回も3回も同じ攻撃は喰らわないって！こんな俺でも学習はするんだぜ？」

そういつてこん棒を持つ手を蹴りこん棒をどつかへ飛ばすと顔面に2、3発食らわした後蹴りで一気に吹っ飛ばした。

次に振り返りながらコスモガンナーを近距離で放ちグレンド星人を打ち抜くとグレンド星人は爆発を起こした。

「それにしても……数が多いわな……」

ロウは目の前に居るいくらかのグレンド星人を見て呟いた。そして拳をこきこきと鳴らすと、足でリズムを取り出した。

「俺のとおきのおきの技分身殺法……テメーらに見せてやるぜ！」

そう言う足のリズムをドンドンと速めていきなんとロウが3人に分かれた。

「これで手間は3分の1だ!!行くぜ!!」

そう言うてロウ3人はグレンド星人に向かって攻撃を開始した。

「行くよララちゃん!!」

「うんミウちゃん!!」

ララとミウの二人は仲の良い長所を使い息のあったコンビネーション技でドンドンとグレンド星人を倒していく。

「やったあ!!」

ララが少し油断をすると右のほうからグレンド星人が襲い掛かってくる。

「きゃああ!!」

「危ないララちゃん!!」

ミウはとっさにララに襲い掛かろうとするグレンド星人をコスモガンナーで打ち抜く。何とかララに襲い掛かる前に撃つ事は出来、大丈夫であった。

「大丈夫・・・ララちゃん？」

「うんミウちゃん。ちょっとあたし油断しちゃった・・・エヘヘ・・・」

といって後頭部に手を回してミウに謝る。

「もう！戦いの最中なんだからララちゃん油断しちゃ駄目だよ！」

「はーいミウちゃん！」

そう言って二人は再びグレンド星人に向かってコスモガンナーを放った。

「うおおおおー！！」

翔はコスモランサーでグレンド星人を斬りつけた。その後グレンド星人は倒れ爆発した。

「つええ！！このスーツは凄いぞ！！」

翔は自分の今の状況にとっても興奮していた。彼は熱血ロボットアニメのマニアでいつか自分が地球を守る戦いに参加するのが憧れで今

まさに彼はその中にいるからであつた。

『ギャアア・・・!!!』

倒れていたグレンド星人が起き上がり翔に向かって来る。

「ふん！喰らえ・・・」

翔は拳を引いてスーッと息を吸う。

「バーニング連げええきいいい!!!」

翔の左右の手は無数の拳となりグレンド星人に当たっていきドンドンとその数は増える。

「ふぬううおおおお!!!」

最期に渾身の一撃を食らわした。グレンド星人は思い切り吹っ飛んで爆発した。

翔はくるりと後ろを向いた。そこには黒い鎧の騎士が立って翔を見ていた。

「さあ、あとはお前一人だぞ!!」

『ふ・・・コスモマンそれで勝ったつもりか!!!』

黒い鎧の騎士は手から無数のエネルギー弾を放つ。

「これで!!」

翔はコスモランサーでエネルギー弾をはじいていく。そして最期の一個も弾き飛ばした。

「どうだ!!」

『なら・・・勝負!!』

黒い鎧の騎士は右手を横に出すと大きな剣が現れた。

「ああ・・・!!」

翔もコスモランサーをぐつと構える。

そして、少しの間沈黙が流れると二人は一気にお互いに近づくように駆け出した。

『朱雀高速斬り!!』

「うわああああ!!!!」

お互いに斬りつけた。二人はお互いに向かい合わず制止している。

「・・・・・・・・ぐうあああ・・・・・・・・」

翔は倒れて苦しむ、どうやら黒い鎧の騎士のほうが一枚上手だったらしい。

「翔!!」

4人が翔の元へ近づいてくる。

「大丈夫か?!翔の兄貴!!」

ロウが翔を助けながら立ち上がらせる。

「ああ・・・なんとか・・・!!」

翔はロウにお礼を言って立ち上がると黒い鎧の騎士を睨んだ。

『・・・今日はここまでにしてやる・・・コスモマン!だが・・・だが次は倒す。それまで、その命きちんとっておくことだ!』

「なによ!!コノーーーー!!」

そう言ってララがコスモランサーで斬りかかろうとしたら黒い鎧の騎士はテレポーションで消えた。

「とりあえず・・・この場は何とかなったな・・・」

翔はそう言って変身を解いたそれに続いて4人も変身を解いた。

ベボロイスはその後地球から抜け出してつきの衛生上にいた。

そのベボロイス内では先ほどの戦いを終えた黒い鎧の騎士グラリスは窓から地球を見ていた。

「コスモマンか・・・面白い・・・」

すると、彼の元に四幹部が現れた。

「どうだった？コスモガーディアン……いえ流星戦隊コスモマンは？」

レイナがグラリスに聞く。グラリスはふっと微笑む。

「ブラック、ブルー、イエロー、ピンクはやはり訓練を受けてるだけがある。レッドは訓練を受けてないらしくがさつであるが……一番面白い……」

「へえ〜。そうなの……フフフ……」

レイナは笑って地球を見た。

5人はレイの元へ向かって翔を先頭に走っていた。

「翔君まだなの？」

ミウが翔に聞く。

「こっちだ!!」

翔が言うとそこには先ほどのようにレイが横たわっていた。

「レイさん！俺たち何とか勝ちましたよ!!……レイさん……」

・・・？」

翔が呼びかけてもレイは微動だにせず横たわったままである。

「どうしたんだ・・・レイ隊長・・・」

ロウがレイの元へ代って肩をゆするがそれでも何もしない。シンがそっと近づいて脈を調べた。

「・・・レイ・・・隊長・・・」

シンは涙を流した。

「嘘でしょ？レイさんが死ぬわけ無いじゃん！」

ララはそう言うが、シンは首を振る。

「・・・レイ隊長はもう・・・死んでしまった・・・もういないんだ・・・」

シンはそう言うて立ち上がり、翔を見た。

「翔・・・！民間人の君を巻き込んですまない！だが、それを手にしたからには・・・一緒にデッドロンを倒して欲しい」

「・・・シン・・・ああ！倒そう！・・・レイさんの仇・・・皆の仇だ！」

5人は手を重ね決意した。

まだ戦いは始まったばかりである！頑張れコスモマン！

2nd stage 煌川翔（後編）（後書き）

次回予告

こうして翔はシン、ロウ、ララ、ミウたちと共に戦うこととなった。

そんなこんなで翔の家で5人は共同生活をする事になる。

そんな矢先に再びデッドロンの攻撃が！！

そして、それぞれに新たな武器が！！

「これでも喰らえ！コスモバスターシュートオ！！」

次回 流星戦隊コスモマン 3rd stage 必殺コスモバスター！ お楽しみに！

3 r d s t a g e 必殺コスモバスター！（前編）（前書き）

第3話ですうゝw

3rd stage 必殺コスモバスター！（前編）

「朝か・・・・・・・・・・まだ眠いな・・・・・・・・」

翔は一回上半身だけをベットの上で起こしてしばらくボーっとしていた。

首を横に動かして時計を見ると7時を針はさしていた。

「・・・・・・・・・・まだ眠いし寝ちゃおう・・・・・・・・」

翔はそう言って寝ようとしたが・・・・・・・・。

「おつきろ〜〜〜〜〜〜！！！！」

「・・・・・・・・・・うわああ！！！！・・・・・・・・・・ララか・・・・・・・・」

「起きた？！翔君！」

「ああ・・・・・・・・・・もうバッチリとね・・・」

翔はそう言って寝室の入り口で立っているララに苦笑いをするベツドから抜け出した。

そして、すぐに服を着替えてリビングへと足を運んだ。

「おはよう」

シンが新聞を必死に全宇宙用万能電子辞書を使い読みながら挨拶し

てきた。

「ああ・・・おはよう」

翔がテレビをつけると次にロウが飛んできた。

「や~~~~と新聞配達終わったぜ！あ！翔さんおはよう！」

「ああ。おはようさん」

そして翔は一回欠伸をすると洗面所に言って顔を洗った後台所へ向かった。台所ではミウが朝食の準備をしていた。

「おはようございます。翔」

「ういどうもおはようさん」

翔は右手を上げて挨拶して冷蔵庫から牛乳を取り出してそれをコップに注ぎ一気飲みをした。

そう、あのデッドロン地球初襲来の後シン、ロウ、ララ、ミウの4人は翔の家で住むこととなった。幸い翔の家は家賃が安いものなかなかの広さがあり十分に5人で過ごせていける家であった。

4人は地球人と言う姿を装って暮らす事となった。

翔はもともと大学生であつたのでそのまま学生。

シンは根元ねもと 真しんと名乗り、コンビニの店員として働き始め、ロウは

江花 楼太と名乗って新聞配達をはじめ、ララは瀬戸 ララと名乗ってレストランで働き始め、ミウは天柳 美羽と名乗り翔の家で5人の家事をする事となった。

とりあえずまあ4人がしつかりと働いたりしてくれてるので生活はそこまでは困らないようである。

因みにコスモジェットたちは自動操縦モードでコスモアースへと帰っていった。

「それにしても……ここ2、3日はデッドロンは来ないようだね」

翔がトーストを食べながら言う。

「ああ……それも少し気になるところだな……」

シンがコーヒーをすすりながら呟く。

「まあ………来ない方がいいじゃん！」

ロウが笑いながら言った。翔は確かにと思い少し微笑んだ。

デッドロン4幹部とグラリスはベボロイス内で静かに集まっていた。

「まさか………コスモガーディアンのがあそこまでとはねえ……」

「・・・」

レイナは腕を組みながら不機嫌そうに言った。

「確かに油断はしてだねこりゃあ・・・」

バンドルが頭を掻きながら言う。

「・・・」

グラリスは少しも喋らずただただ4人の会話を聞いているだけであった。それを見てレイナは喋った。

「で、どうすんのさグラリスさん？」

「・・・なにがだ？」

「なにがってあんたのせいで最初の地球侵攻失敗しちゃったじゃない！」

「・・・それがどうした？」

「それがどうしたって・・・あなた何言ってるの！！」

レイナが近づいて叫ぶ。グラリスはギリッとレイナを睨む。

「まだ始まったばかりだ・・・そう色々言っても意味が無い・・・」

するとシャムンズが話し始めた。

「確かに．．．．．グラリスの言う通りでもあるな．．．ではそろそろ．．．．．B級囚人を使うか？」

全員がシャムンズのほうを見る。

「え．．．．．使っちゃうの？」

バンドルが驚いたようにシャムンズを見る。シャムンズは頷く。

「まあ．．．グレンド星人だけじゃあ勝ち目が無いのはわかったし俺は賛成だ」

「私もだ」

シャムンズ、グラリスが言った。

「じゃあ使おうよ！ね！レイナ」

バンドルがレイナに言う。

「そ．．．．．そうね。じゃあシャムンズお願いね」

「わかった．．．．．」

シャムンズが指をパチンと鳴らすと5人の中心の機械から囚人が一体現れた。

『グルアアアアア！』

「コイツはB級囚人、ストロン星人ゴレムスだ、さあゴレムス地球に行つて、コスモマンともども破壊して来い！」

『了解しましたああああ！』

そう言つてゴレムスは地球へとワープしていった。

女子高生などがくつちゃべつてゐる繁華街。やはり人が多く子どもなども居てにぎわっている。

「・・・・ん？」

急に上空から大きな石がごろごろと落ちてきた。

「わあ！危ないぞ！！！」

「逃げろお！！！」

人々が逃げる。すると、逆の方からグレンド星人がまた現れた。

『ぐるぐる・・・・・・』

「一体なんなんだあ！」

「わああああ！！！！！」

人々が逃げ惑う。

そしてビルの上ではストロム星人ゴレムスがその状況を見て笑っていた。

『がっはははは！逃げ惑え！叫べ！そして苦しめ！がっはははははは！』

ピロピロピロ………

5人の居る部屋から突如警報が鳴り響いた。

「ん？なんだ……これ」

翔は警報を見る。するとシンはテレビをつけてチャンネルを変える画面にはなんと町で逃げ惑う人々が映し出された。

「………デッドロンが来たか………」

シンが言う。

「じゃあ………行かないとじゃん！」

ララが両手を頬に当てていった。

「皆行こう！」

翔が言くと4人は頷き家から出た。

「…………おっと！戸締りとね」

ロウはしっかりと鍵をかけて4人を追った。

『グッハハハハハハ！地球人は脆い！脆すぎる！！』

ゴレムスが笑い叫ぶ。すると目の前に子どもが逃げているのを見つけた。

「あ！…………ああ…………」

子どもは泣きながらゴレムスを見る。

『グッハハハハ…………お前も死ね…………！！』

「きゃああああ！！」

ゴレムスが子どもを襲おうとしたときだった。

「待て！！デッドロン！！」

『うつん？！なんだ！！』

そこには、翔、シン、ロウ、ララ、ミウの5人が立ちはだかっていた。

『何だ貴様らは・・・・・・・・!!』

翔は右手を前に出して構える。

「行くぞ!!」

「「「「おお!!」」」」

5人は変身の準備をする。

「「「「コスモチエンジャー!!」」」」

5人は赤いボタンを押してそれぞれ変身をした。

3rd stage 必殺コスモバスター！（中編）

5人は光に包まれていく。そしてコスモマンとなつた5人が現れた。

「赤き炎の星の戦士！ マーズレッド！」

「蒼き水の星の戦士！ マーキュリーブルー！」

「黒き大地の星の戦士！ サターンブラック！」

「黄色の光の星の戦士！ ビーナスイエロー！」

「桃色の愛の星の戦士！ プルートピンク！」

「邪悪な宇宙の悪を排除する宇宙に煌く五つ星！流星戦隊！」

5人がポーズを取り叫ぶ。

「~~~~コスモマン！！~~~~」

5人を見て茶色の大きな身体を使ってゴレムスがグヘグヘト笑い出す。

『そうか……貴様らが……コスモマンか！！』

「ああ！俺たちがコスモマンだ！！」

マーズレッドがゴレムスを指差して叫ぶ。ゴレムスはニヤリと微笑むと黒い球を投げた。

黒い球は地面に落ちると共にグレンド星人が大量に現れた。

『グルアアアア………』

グレンド星人がコスモマンのほうを見て拳をゴキゴキと鳴らしている。

「そうはさせない！コスモランサー！」

マーキュリーブルーがコスモランサーを手に持って構える。

「行こうララちゃん！」

ブルートピンクがビーナスイエローに言う。

「うん！ミウちゃん！コスモガンナー！！」

ビーナスイエローとブルートピンクが上空へ跳んでグレンド星人を打ち抜いていく。

「いつくぜええええ！！」

サターンブラックはドンドンと相手を蹴り飛ばしていく。

後ろからグレンド星人が殴りかかってくるのをサターンブラックは察し下にしゃがみこむ。そのまま拳は前にいたグレンド星人に直撃した。

「伊達に格闘技マニアじゃないんでね！」

サタンブラックはドンドンと打撃技で圧倒していた。

『ぐぬぬぬ……何をしているんだ……!』

グレンド星人が倒されていく様子をゴレムスはいらついていた。

「へっ！暇してるんだったら俺が相手だ！デッドロン！」

マーズレッドがゴレムスを挑発する。

『ぐううう……何を……俺様舐めやがって……』

ゴレムスは手に力を入れ始めると大きな岩が出てきた。

『ぐらあ……!』

「そんなもの当たるか！」

マーズレッドは岩を簡単に避けると一気にゴレムスに近づく。一気に懐にもぐりこむとゴレムスの腹部へ一発入れる。

「……うう！」

マーズレッドが拳を引くと拳からは血がにじみ出ていた。

『ぐはははは！俺様は宇宙一硬い岩石で出来てる事を知ってるか？知るわけないか！グッハハハハハハ!』

ゴレムスがマーズレッドを掴むと一気に投げ飛ばす。マーズレッド

はそのまま壁に叩きつけられる。

「翔!!」

ブルートピンクが駆け寄る。

「ああ……大丈夫だ……くう」

ブルートピンクはコスモランサーを変形させてコスモガンナーに変える。

「このお!喰らえコスモガンナー!!」

コスモガンナーの銃口からビームが放たれるがゴレムスはものともしない。

『ぐっはははは!!どうした!そんな攻撃効かんぞ!!』

ゴレムスが地面を叩く。すると岩の波がマーズレッドとブルートピンクの二人に襲い掛かってくる。

「きゃあ!!」

ブルートピンクがひるむ。マーズレッドは立ち上がってブルートピンクをお姫様抱っこして上に飛ぶ。

「はあはあ……大丈夫か?」

マーズレッドは何とか安全なところに着地した。残りの3人も来た。

「あいつ……コスモガンナー効かないの?!」

サターンブラックがゴレムスを見る。

「ああ……うわあ!」

ゴレムスが岩をドンドンと投げてきた5人は思いっきり吹っ飛ばされる。

「ぐうっ……」

『ふん……脆すぎる! 貴様らも俺様の宇宙一の硬い体の前では無力のようだな!』

「勝てないのか……!」

ゴレムスがドンドンと近づいてくる。その顔は悪魔のように笑っていた。

『これでお終いだ!……と言いたい所だが俺のほうが限界らしい……』

ゴレムスの身体は岩を使いすぎて大分傷が多くなっていた。

『次ぎ会った時には必ずお前ら5人を殺す! せめてその命大切にな!』

そう言ってゴレムスは消えた。

「待て……クソ!」

シンはマーキュリーブルーから変身を解いた。

「あいつの体……コスモガンナー、ランサーが全然効かなかった……」

翔が痛めた左腕を右手で支えながら言った。

「このままじゃ……私たちアイツに勝てないの？」

ララが心配そうに言う。

「ああ……何とかしないとアイツに勝てないぞ……！」

シンは、悔しそうにゴレムスの居た場所を見ていた。

「ゴレムス良くやった!!」

ヴァルガスが嬉しそうにゴレムスの背中を叩いた。

『ちよつと……やめてくださいよ……今からだ壊れやすいんですから……まあヴァルガス様の攻撃ですけど!』

「がっははは!そうかそうか!!」

ヴァルガスは大きな口を開けて大きく笑った。その様子を他の4人はやれやれと言う感じで見ていた。

「全くヴァルガスは・・・」

レイナは鼻で溜息をして首を横に振りながら笑っていた。

「だが・・・コスモマンの事だ次までに何か仕込んでくるだろうな・・・」

グラリスが言う。

「だろうね！あいつらもばかじゃないしね！」

バンドルも言う。

『だが・・・俺様のこの体がある限りアイツに勝てるわけがない！』

「どうする・・・このままじゃ勝てないっすぜ・・・」

ロウが頭を抱えながら言う。4人も頷く。

「ああ・・・あいつの身体は並大抵の囚人の体とは違う・・・」

シンがうつろつろと歩きながら言う。

「どうすんのお～～」

ララが足をバタバタさせながら騒ぐ。

「ララちゃんそんな言ったってどうなるわけじゃないわよ……」

ミウがララを落ち着かせる。

「どうすりゃあいいんだ……!!」

翔が言った直後であったコスモブレイザーが鳴り始めた。

「なんだ？」

翔がコスモブレイザーを見る。シンが目を見開いている。

「本部からの通信だ！」

全員は通信モードを起動した。

「こちらコスモマンです！」

シンが言う。

『こちら本部だ！みんな喜べ！遂に出来たぞ君たちの新しい武器が！』

「あ……新しい武器？」

翔は不思議そうに言った。

3rd stage 必殺コスモバスター！（後編）

『ああ！そうだ・・・君たちの新しい武器コスモウエポンだ！』

「こすも・・・・・・・・」

「うえぽん・・・・・・・・？」

ロウとララが言った。

「何ですかそのコスモウエポンって奴は？」

翔が聞く。

『コスモウエポンはそれぞれの個人武器でコスモランサー、ガンナーよりも威力は数十倍だ！』

「す・・・・・・・・凄いな！」

ロウが嬉しそうに言う。本部の通信はまだ話を続ける。

『さらにこのコスモウエポン5つを組み合わせると君たちの最強の武器コスモバスターが完成する！』

その話を聞いたミウが思いついたように言った。

「もしかしたらそれを使えば・・・・・・・・あのデッドロンの囚人を倒せるかもしれないわ！！」

「あ………！そうだな！勝てるかも！！」

翔がミウを見て嬉しそうに言う。

その時であった。再び警報が鳴り響いた。

「どうやら………またあいつが来たみたいだな………！」

シンが警報を睨みながら言う。

「行こう！皆！」

翔がそう言うところ人はデッドロンの元へと向かった。

『ぐわっはははははは！！あいつらが居ないから地球侵略が簡単だわ！』

ドンドンと人を襲っていくグレンジ星人。それを見てゴレムスが笑っている。

「きゃああああー！！」

「早く逃げろおおおおー！！」

人々はドンドンと逃げ出す。しかしグレンド星人はそれを追いかけていく。

『ぐわっははは！その意気だ！もっと苦しめる！！もっと地獄を見せろ！！』

するとグレンド星人の2・3体が青い光線で打たれ爆発した。

『ぬっ？！』

「そこまでだ！！」

するとコスモレッド、マーキュリーブルー、サターンブラック、ビーナスイエロー、プルートピンクの5人が居た。

『また貴様らか……………コスモマン！！』

「へ！俺たちは貴様らデッドロンから宇宙を守るためにいるからね！！」

サターンブラックがゴレムスを指差しながら言う。

『しかし……………貴様らの武器では俺様の宇宙一の硬いボディに攻撃は出来まい！！』

するとマーズレッドは天に手を挙げた。

「コスモウェポン！！マーズブレード！！」

するとマーズレッドの手には赤いコスモランサーよりも強力そうな剣が現れた。

「コイツで勝負だ！」

「コスモウエポン！！マーキュリーバズーカ！！」

「コスモウエポン！！サターントンファー！！」

「コスモウエポン！！ビーナスバトン！！」

「コスモウエポン！！プルトアーチェリー！！」

マーキュリーブルーにはマーキュリーバズーカ、サターンブラックにはサターントンファー、ビーナスイエローにはビーナスバトン、プルトピンクにはプルトアーチェリーがあった。

『なんだそれは・・・！！』

「これは俺たちの新しい武器だ！！行くぜ！！」

マーズレッドが叫ぶと共に全員が向かっていく。

『ぐっはははは！そんなものが効くか！！』

「それはどうかな？！マーキュリーショットオ！！」

マーキュリーバズーカの銃口から青い光線が撃たれる。

『そんなものおお！！くらんわ！！！！』

そう言つてゴレムスは右手を前に突き出す。だが、手に直撃すると同時に手が爆発する。

『ぐ．．．．ぐおおおお．．．！！』

「まだまだサターントンファアアアア！」

サターントンファアを持ったまま一気にサターンブラックはゴレムスの懷に飛び込む。

「喰らえ！！！」

腹部に一発サターントンファアが直撃する。

『ごふあああ．．．．．』

「喰らいなさい！プルートアーチェリーシュート！！！」

プルートピンクの放った矢がゴレムスの足に刺さる。

『がああ．．．．．』

ゴレムスが悲鳴を上げる。

「バトンで攻撃だよーん」

ビーナスイエローがバトンでドンドン岩を削っていく。

「さあ翔君！！！」

「オツケーー!!うおおおお!!」

翔がマーズブレードを構えると、マーズブレードの刀身が炎で包まれていく。

『な……なんなんだ……!!』

「喰らえ!!火星一文字……!!」

一気にマーズレッドは上空へ飛ぶ。

「斬り!!!!」

一気にゴレムスに斬りかかる。ゴレムスの体の岩が完全に崩れ落ちる。

『ぐあああ……!!』

「皆一気に決めるぜ!コスモバースターだ!!」

「『『『『『おおう!!』』』』」

5人が上空へコスモウェポンをほうると自動的に合体してコスモバスターが完成した。

「行くぜ!!」

マーズレッドがグリップを握る。

「エネルギーフルチャージ！」

プルートピンクが言う。

「銃身冷却完了〜〜」

ビーナスイエローが言う。

「標準……………セット！」

マーズブルーが言う。

「最終準備かんりょうつす！翔さん後は任せました！！」

サターンブラックが言ったのを確認すると翔は引き金に指をかけた。

『うあああ・あああああ！！』

「喰らえ！！必殺コスモバスターシュートオオオオオオ！！！」

翔が引き金を引くと一気に銃口から物凄いエネルギー弾がゴレムスに目掛けて放たれた。

『うあああ……………うあああああああ！！』

直撃すると同時にゴレムスは爆発した。

「また．．．．やられたか．．．．」

ヴァルガスが悔しそうに地球を見ていた。

「次こそ．．．．必ずだな．．．!!!!」

バンドルがペロツと口を舐めた。

3rd stage 必殺コスモバスター！（後編）（後書き）

次回予告

流星戦隊に新しい武器コスモウェポンを手に入れて何とかゴレムスを倒せた！

そんな中翔は仲間を信じられない少年コウイチに出会う。

昔のトラウマに悩まされるコウイチに翔は仲間の大切さを教えようと決意する。

そんな中、現れるデッドロンの囚人！だが、今回はいつもと違った！

「コイツ巨大化した……！！」

そして現れる新しい武器巨大ロボットコスモカイザー！

翔はコウイチ少年に仲間の大切さを伝えられるのか？！

次回 流星戦隊コスモマン 4th stage 友情の力 コスモカイザー現る！

4 t h s t a g e 友情の力 コスモカイザー現る！（前編）（前書き）

4話ですうゝ。まあゆっくりと見てくださいねw

4th stage 友情の力 コスモカイザー現る！（前編）

晴れた日。そう言う日は翔はいつも街中をのんびりと散歩するのが好きである。

「いっやあゝゝいい天気だな・・・こういう時はやっぱり散歩だよな・・・」

耳にはイヤホンをつけてお気に入りの曲を聴いて気分はいい。

翔は愉快的気分で見えた。

「おい！コウイチ！またお前のせいじゃねえか！！」

「お前があそこでドリブルするからだよ！パスをしっかりとしろよ！！」

「・・・だつて・・・」

一人の少年が数人の子どもに囲まれて色々といわれているようだ。翔はそれを見てそこに駆け寄る。

「こら！君達イジメはよくないぞ！！」

翔が子ども達に言う。

「何だよお兄さん！関係ないだろう！！」

一人の少年が翔を見て無愛想に言う。

「そつだよ！これは俺たちの問題なんだ！！あっち行っててよ！」

翔は少しショックを受けるが言い返す。

「ま・・・まあそつだけど、一人相手に大勢で色々言うのは駄目だぞ！かわいそうじゃないか！」

「いいんだよ！こんな奴！こんな自己中なんて！もういいや行こうぜ！」

「うんいこいこ」

そう言つて少年を一人残して他の子ども達は去つていった。

「・・・ぐすん・・・」

少年はべそを書きながら立ち上がった。袖で目をこすり涙を拭いて鼻をすすりとぼとぼと歩き始めた。

「ね・・・君」

翔が呼び止める。すると少年はくるりと向きを変えて翔を見た。

「ちよつとき、お兄さんとサッカーしない？」

翔は少年の持つサッカーボールを指差して少年に微笑みかける。

「いいよ・・・僕どうせ個人プレイしか出来ないから・・・」

そう言つて翔に背を向けて下を向きながら歩いていった。

「なんだあの子……?」

翔は鼻で溜息をしてまた歩き始めた。

「全くどうするんだよ……!!」

ヴァルガスが物凄く重そうなバーベルを上げたり下げたりしながら叫ぶ。

「ちよつとうるさいわよ!ヴァルガス!静かに出来ないの?」

レイナが腕を組みいらしながらヴァルガスに言う。

「いいだろう!!俺の勝つてだ!五月蠅いならお前がうせろ!」

「何ですって?ここはあなただけの場所じゃないのよ!この筋肉牙馬鹿!」

レイナの言つた言葉を聞くとヴァルガスはバーベルを投げ捨てレイナの方を見る。

「なんだと?このクソあまが……!!」

ヴァルガスが牙をむき出し戦闘形態に入る。

「良いわ……この脳無し!!」

レイナはエネルギーを集め始める。

するとそんな二人を止めるように誰かが手をパンパンと叩いた。2人はそちらを見る。

「なあにやってんだよ。たかが2回コスモマンにやられたぐらいでそういらいらすんなよ」

バンドルが笑顔で言う。

「……そうね……」

「悪いな……レイナ……」

「ええ……こっちもごめんなさい……ヴァルガス」

バンドルがその様子を見て微笑むと地球の方を見た。

「2人とも今度はいらさせないよ」

「えっ?! ということ?」

レイナがバンドルに聞く。

「まあ……見ててよ」

バンドルは二人を見て笑った。

翔はその後もう少し散歩がてらに色々歩いていた。河原に着くとそこにはさっきの少年コウイチの姿があった。坂に座って川を見ていた。

（さっきの子だ・・・こんな所で何してるんだ？）

翔はそう思うとコウイチの所へ歩み寄った。

「なにしてんの？」

翔はコウイチの肩を叩く、コウイチは驚いたように翔の顔を見た。

「さっきのお兄さんか・・・何なんか用？」

少年は素っ気無く聞く。

「なんだよ・・・まあさ、一人で何してんのかなって思ってたさ」

「別に只ボーっとしてただけだよ」

コウイチはそう言ってまた川の方をむき溜息を漏らした。

「さっきさ・・・なんであんなに友達に囲まれて、色々言われてたの？」

翔がコウイチに聞くとコウイチはまた溜息をついて話を始めた。

「僕さ・・・サッカーチームに所属してるんだ・・・前はここじゃないとこすんで違うチームに所属してたんだ。そのころは僕は仲間を信じてただけど・・・今は信じられない・・・仲間を・・・」

「ど・・・どうして？」

「僕のいた前のチームはすごく強くある日県大会の決勝まで行ったんだ。勝てば全国大会で皆凄いやる気だった。もちろん僕もね・・・」

「それで・・・？」

翔が聞く。

「でね、0-1で負けててね残り1分くらいで僕がボールを持つてたんだ。僕はドリブルで一気に相手のゴール近くまで運んで味方にパスしたんだ、その味方はエースでキャプテン。僕の心から信頼してる友達だったんだ」

「ソイツにパスしたんだったらいいんじゃないか？」

翔が聞くがコウイチは首を横に振る。

「アイツに綺麗なパスを放ったよ。そしたら・・・アイツ・・・トラップミスをしてそのまま相手に取られて時間切れ。0-1で負けたんだ・・・そしたらアイツなんていったと思う？」

「え・・・わかんないな・・・」

「『お前の下手なパスのせいで負けたんだ！・・・この下手くそ！』だって・・・もう僕何がなんだかわかんなくなって・・・パスするのが嫌いになって気付いたら一人になってたんだ」

「そうだったのか・・・」

翔は目に涙を浮かべるコウイチを見て何故だか悔しかった。

「コウイチ君・・・仲間を信じられないのか？」

コウイチは少しためらいながら首を頷かせる。翔は拳を握るとコウイチの肩を握った。

「コウイチ君！仲間は大切なんだ！人間は誰も一人で何かを成す事は出来ない！でも仲間がいれば何でもできるんだ！」

「・・・そんなの嘘だよ！」

コウイチは叫ぶ。翔は首を振る。

「それなら・・・今度見せるよ！！仲間の大切さを・・・！！」

「お兄さん・・・」

すると急に翔のコスモブレイザーが鳴り響いた。するとシンの声がした。

『翔聞こえるか?!』

「ああ！どうしたデッドロンか？！」

翔がシンに問う。

『ああ・・・そうらしい・・・すぐに来てくれ！！』

「わかった！」

そう言って翔は通信を切り、翔はコウイチのほうを見た。

「ゴメン俺・・・行かないといけないよう字が出来た今度見せるよ！！！」

「え・・・うん！」

「早く家に帰るんだよ！！！」

そう言って書は少年の元から離れた。

『グワツハハハハハハ！！！！！！』

狼のような囚人ウルファアが大きく笑いながら町の中を歩いていた。

「うわああああ！！！」

「逃げる・・・逃げる!!」

まわりではグレンド星人が民間人を襲っている。

「待て!! デッドロン!!」

『なんだ?!』

ウルファーはその声をするほうをむいた。そこには翔達5人の姿があった。

「地球をそう簡単に侵略はさせないぜ! 行^くぜ皆!!」

「「「「おう!!」」」」

全員が右腕を前に出す。

「「「「コスモチエンジャー!!!」」」」

全員はそう言^つて赤いボタンを押し、光に包ま^れるとコスモマンに変身した。

4th stage 友情の力 コスモカイザー現る！（中編）

『貴様らが・・・・・・・・コスモマンか・・・・・・・・！』

ウルファーは5人を見てニヤリとわらう。

「何が可笑しい！デッドロン！！」

『貴様らの命がもう少ないのを思うとかわいそうだな・・・・・・・・ぐふふ・・・・・・・・ガッハハハハハ！！』

ウルファーは大笑いするとコスモマンに目掛けて球を投げる。そしてそこからグレンド星人が現れた。

「そつくると思ってたさ！コスモウェポン！！」

5人は天に手を挙げてそれぞれ残すもウェポンを手にした。

「行くぜええ！！」

マーズレッドはグレンド星人の大群に突っ込んでいった。

コウイチ少年は一人とぼとぼ歩いて家へ向かって大通りの近くを歩いていた。

さっきからコウイチ少年の頭には翔の言っていた“仲間の大切さ”

が頭に鳴り響いていた。

(……仲間か……でもそう言って結局みんな自分の事しか考えてないんだ！)

コウイチ少年は仲間と言うことを考えるだけで鬱になるのがわかっていた。

自分しか信じられなかった、人を信じるのがいやになった。

コウイチ少年は自分がどうすればいいのかわからなくなっていた。

(……僕は……どうすりゃあいいんだ？……)

するとコウイチの東の方向で爆発音がした。コウイチは横を向く。

「なんだ……？何があつたんだ……？！」

コウイチは己の興味に流されるままその方へと向かって走って行った。

「マーズブレードの切れ味は今日も絶好調だ！！」

マーズブレードは調子よくグレンド星人を切り倒していく。そんなマーズブレードを見てマーズキュリーブルーが言う。

「調子が良いのはいいが……あまり乱すなよ」

「わかってる！チームワークだよな！」

「ああ」

そしてあつという間に数十体もいたグレンド星人をコスモマンの5人は倒してしまった。さすがにこれにはウルファーも驚いていた。

『伊達にコスモガーディアンではないんだな……面白いぜ!!』

ウルファーは笑みを浮かべると足でリズムを取り出した。

「なんだ……アイツ？」

ブラックサターンがウルファーを見て言う。

「わかんないけど……リズムを取ってるわね……」

プルートピンクが観察をしながら言う。

「じゃあとりあえずアタックしよう!!」

ビーナスイエローはそう言ってビーナスボタンを構えながらウルファーに向かって走っていく。

「ちょっと!!ララ!!」

マーズレッドが呼び止めるがビーナスイエローはそのまま走っていく。

「まあ……ララのことだ大丈夫だ、それよりも観察といこうではないか……」

マーキュリーブルーがそう言ったのでとりあえずマーズレッドは様子を見ていた。

「ええい！ララアタックー！！」

そういつてララはバトンでウルファーに突きを入れようとした。

『……フフ……ガッハハハハ遅いわ！！』

そういつて簡単にララのバトンを避けると簡単にビィナスイエローを吹っ飛ばした。

「きゃああああ！！」

「ララー！！」

4人がララの元へ近づく。

「えへへ……駄目だった……」

ララが後頭部を書きながら簡単に立ち上がる。

「大丈夫なの？ララちゃん」

プルートピンクの問いかけにビィナスイエローは頷いた。

『ガハハハハ！お前らのスピードどうやら遅いようだな！…どうやら俺様の敵ではないらしいな！』

ウルファアは再び高笑いをする。

「くそ……………」

『てことだ…………死ね！！！！』

そういつてウルファアは両手からエネルギー波を放った。

「う・うわあああ！！！」

コスモマンの5人はもろに喰らってしまい思いっきり吹っ飛ばされてしまった。

5人は地面に叩きつけられた強い衝撃で変身が解ける。

「へ…………変身が解けた…………！！！」

翔は自分の両手を見る。

「どうやら…………油断してたみたいだな……………」

シンが言う。

「だね……………」

ロウが言う。その時右の方の草むらからガサっと言う音がした。

「あ・・・」

翔はその方向を見て思わず声が漏れてしまった。その草むらにはコウイチ少年が居たのだ。

「怖いよ・・・怖いよ・・・」

コウイチ少年は身震いを必死に抑えていたがその我慢が一瞬切れてしまったらしい。

翔にも気付いたのであるからもちろんウルファーも気付いていた。

『地球人が・・・グハハハハ・・・!!』

ウルファーはコウイチを見つけると静香に片手をコウイチに向けた。そして手が黒い紫に光り始める。

「・・・お母さん・・・怖いよ・・・」

コウイチ少年はバックで頭を隠し必死に恐怖と戦っている。

『さらばだ・・・!!』

ウルファーの手からエネルギー弾が放たれた。

「そうはさせるかあああああ!!」

翔は立ち上がるとコウイチのところへ向かい全力で走りコウイチを抱き上げると床にとび頃がち落ちた。

そしてエネルギー弾は草むらで爆発を起こした。

『ちい……しくじったか……』

「大丈夫？」

翔が聞く。

「さっきのお兄さん……なんでここに？」

コウイチが聞くと翔は笑った。

「ちょっと地球を守るためにね……！見ててね、俺と……仲間を！」

そう言って翔はコウイチを安全なところへ置くと4人の元へ走った。

「皆もう一度変身だ！！」

「ああ」

「ういっす！！」

「うん！」

「わかったわ！」

5人は再びコスモブレイザーを構える。

「『『『『『コスモチェンジャー！！』』』』』」

5人は再びコスモマンへと変身した。

『何度やつても同じなのがわからんか!!』

ウルファーが叫ぶ。それにマーズレッドが返す。

「はん！俺たちは1秒ごとに成長するんだ！皆行くぞ!!」

『うるせええええ!!』

ウルファーは再び両手からエネルギー波を放った。

「皆跳んで離れましょう！」

プルトピンクの呼びかけに5人は一気に五手に別れた。

「俺から行く！マーキュリーショット!!」

マーキュリーブルーは空中でマーキュリーバズーカを放つ。

『ぐおお・・・!!』

ウルファーは驚いたがすぐにそれをかわす。

『そんなノロマの攻撃は効かないわ!!』

ウルファーがマーキュリーブルーに言い放つ。

「そうか・・・だがそれは避けられんだろうな」

『ああん?!』

ウルファーが足元を見るそこにはサターンブラックがいた。

「俺のほうが速いんだよ!スピードスターロウ様をなめるなよ!」

そう言ってトンファーを使いウルファーにアッパーを食らわす。

『ぐおお……!』

ウルファーは足をふらつかせる。

「へんどうだ!」

サターンブラックが言った後ウルファーはサターンブラックを蹴り飛ばす。

『ぐああああ……!俺のほうが速い!』

ウルファーが叫ぶ。

「大丈夫!」

ぶっ飛ばされたサターンブラックをビーナスイエローとプルートのピクが受け止めた。

「ああ……悪いな」

「大丈夫よ!さあ行くわよ!」

「すごい・・・チームワークがいい」

コウイチはコスモマン　　翔達の戦いを見て思わずそう呟いていた。

謎の強そうな敵に向かって5人で力をあわせて戦っている。個々の特性を生かした戦いをしている。

コウイチ少年の胸の中の何かが熱くなっていた。

「がんばれ・・・おにさん・・・おにさんの仲間達・・・！」

コウイチは拳をぐつと握った。

「バーニング連撃！！」

マーズレッドの無数の熱いパンチがウルファーに直撃する。

『がああ・・・熱い・・・ぐあああああ！！』

ウルファーはそう言ってひるんだ。

「皆今だ!!」

マーズレッドが4人に言う。

「コスモバスターッすね!!」

サターンブラックがそう言うのと5人は頷き上空へそれぞれのコスモウェポンを放った。

そしてコスモバスターが5人の手元へ現れた。

『ぐっ……うあああ……』

「行くぜ……!!準備はいいな!」

「ああ」

「大丈夫っす!!」

「うん!」

「いつでもいいわよ!」

マーズレッドがしっかりとコスモバスターのグリップを握る。

「喰らええええええ!!!!!!コスモバスター……」

マーズレッドはそう言って引き金を一気に引いた。

「シューートオオオ!!!!!!」

マーズレッドが上を向くと黒い雲がウルファアの残骸の上空だけに集まっていた。

「なんだ??」

サターンブラックがじつと見る。すると黒い雲から雷がウルファアの残骸に放たれた。雷のまばゆい光に全員が手で顔を隠した。

「いったいなんなの・・・よ・・・」

ビーナスイエローは思わず言葉を失っていた。

コスモマンの5人の目の前には巨大化したウルファアが立ちほだかっていたのであった。

4th stage 友情の力 コスモカイザー現る！（後編）

『グアアアアアアアア！！！！！』

雄たけびを上げるウルファーに対して、5人はただ上を見てウルファーを見上げることしか出来なかった。

「聞いてねえぜ……でっかくなるなんて……」

サターンブラックが言う。

「それは俺もだよ……なんだって言うんだよ……」

マーズレッドが拳を握りながらウルファーを睨んだ。

『ガッハハハハ……！！お前らなど踏み潰してやる！！』

そう言ってウルファーは右足をあげて5人を踏み潰そうとする。

「皆避けるお！！」

マーズレッドの一声で何とか5人は避ける事が出来たが明らかに不利な状況である。

「どうするのぉ……？？」

ビーナスイエローが頭を抱えながら言う。

「コスモバスターだ！！コスモバスターで攻撃だ！！」

シンが4人に呼びかけすぐさまコスモバスターの準備をする。

「行くぜ！！コスモバスターシュートオ！！」

マーズレッドがコスモバスターの引き金を引く。銃口からはエネルギー弾が放たれる。

「行けええ！！！！」

エネルギー弾は真っ直ぐ一直線に巨大化したウルファーに向かっていく。

そしてウルファーに直撃をするが

『・・・・・・・・はん！！全く効かんわぁ！ガハハハハハ！！』

ウルファーは当たった腹部を少し払うと再び高笑いしコスモマンを挑発していた。

「き・・・・・・・・効かないのかよ・・・・・・・・」

「どうするのぉ・・・・・・・・？？」

「・・・・・・・・ここまでなの？」

「・・・・・・・・駄目か・・・・・・・・」

4人がそう言って力が抜けたように地面に尻を着いてしまった。

「あ……諦めるなよ！！このままじゃアイツ一体に地球がやられちまうぞー！！」

マーズレッドが他の4人に言う。

「で……でもどうすればいいって言うの？」

ブルートピンクがマーズレッドに問う。

「そ……それは……………」

マーズレッドが言葉に詰まったとき突然コスモブレイザーが大きな音を立てて鳴り始めた。5人は通信モードへと切り替える。

『皆！！大丈夫か？！』

その声は司令官のデルベットのものであった。

「し…………司令！一応大丈夫ですが圧倒的にこっちが不利です……………」

シンがコスモブレイザーのマイク部分にそう言う。

『そうだと思ったが、もう大丈夫だ！コスモジェットの修理が終わったからそっちに転送した！』

そうデルベットが言うとき限の歪みが発生してそこからコスモジェット5機が現れた。

「あれは……一番最初のときの戦闘機なのか？」

マーズレッドが5機のコスモジェットを見て言う。

「ああ……行くぞ！翔！」

そうマールキュリーブルーが言うと5人は跳んでコスモジェットに乗った。

『何だあの戦闘機は……！！』

ウルファアは目を細めて戦闘機を睨む。

「へん！コイツの機動力をなめんなよ！！……ヒヤアッホッ！！」

サターンブラックの乗るコスモジェット3は空中旋回をしながらビームを放つ。

「どうだ……！！」

サターンブラックは見事に全弾をウルファアに直撃させる。

『ぐあああああああ……！！！！！！』

ウルファアはもがき苦しむ。

「行くわよ……いいララちゃん？」

「うん！イッケー……！！」

コスモジェット4、5はバランスの良い攻撃でウルファアを止める。

『あああ……！！！忌々しい！！！』

ウルファアは手で払って2機に向かって歩き出す。

「余所見をしていいのか？」

ブルーマーキュリーの乗るコスモジェット2が背後から攻める。

『ぬうつうつ……！！！』

ウルファアが後ろを振り向く。そしてコスモジェット2を襲おうとする。

「な……！！」

油断していたコスモジェット2は避けるのにはもう間に合わない。

「ああ……！！危ない！！」

地上で見ていたコウイチ少年が言う。

「そつはさせない！！」

コスモジェット1はコスモジェット2に墜落しないように体当たりしてウルファアの攻撃に自ら当たる。

「翔……！！」

マーキュリーブルーが叫ぶ。コスモジェット1は右翼から黒煙を上げている。

「仲間を助けた・・・」

コウイチは呟く。

「仲間を助けた・・・なんでだろう・・・あれ・・・なんでか・・・わかる・・・」

コウイチは不思議な感覚に包まれていた。

コスモジェット1のコックピット内では異常を知らず警報が鳴り響く。

「ち・・・何とか飛べるけどこりゃあまずい・・・・・・」

マーズレッドは必死にレバーを引っ張り何とか上空に飛んでいる状況である。

「翔!!!大丈夫なの?!!」

ブルートピンクの通信が入る。

「結構きついし・・・このままじゃあいつを倒せないっばいな・・・」

マーズレッドはそう言って通信をきくと再びレバーに力を入れる。

「クッソー!! どうすれ……ん?」

マーズレッドはコックピットの画面に何かが映し出されてるのを見た。

「なに……コスモカイザー…….?」

マーズレッドはしっかりと画面を見た。画面には5機の合体システムであるコスモカイザーシステムの事が映し出されていた。

「これなら……!! 皆!!」

マーズレッドが言うと全員の顔が映し出される。

「わかってる!」

「やりましょうぜ! 兄貴!」

「いこうよ」

「これならいけるわ!」

マーズレッドは全員に答えるように頷くとコスモブレイザーを取り画面の横に装着した。

「行くぜ!! 流星合体だ!!」

マーズレッドが叫ぶと5機のコスモジェットは上空に輪を作るように一気に飛んだ。まずコスモジェット3、4が変形し脚部が変わると下半身に変形したコスモジェット2と合体するそのままコスモジ

エット3、4と合体したコスモジェット2は上半身に変形したコスモジェット1と合体する。

次にコスモジェット5が中心を境に二つに分裂して腕になるとそのままコスモジェット1の横部分と接続するそしてコスモジェット1先頭の部分からコスモカイザー頭が出てきた。

「コスモカイザー！リフトアップ！！」

今ここに宇宙の巨大戦士コスモカイザーが地に立った。

5人はそれぞれのコックピットから胸部のコスモカイザー用の専用コックピットへと移った。

「よし！皆行こう！！」

「ああ！」

コスモカイザーはウルファアのほうを向き歩き始めた。

『なんだか知らんが倒す！！』

ウルファアも対抗するようにコスモカイザーへ向かって歩み寄る。

『うがああああ！！』

ウルファアがコスモカイザーを殴りかかろうとする。しかしコスモカイザーはそれを腕で上手くかわす。その隙にコスモカイザーがウルファアに殴りかかる。

『グルアアアア！そうはいくか！』

ウルファーもパンチを腕で受け止める。

「へん！ならこうでどうだ！」

コスモカイザーは腕を内側に回し相手をふらつかせるとその隙を逃がさないように殴りかかる。

『ぐあー！』

ウルファーはふつとばされ地面に叩きつけられた。

「よし今だ！カイザーソード！！」

コスモカイザーの胸が開くとそこから長い刀身の剣が姿を現した。

「行くぜ！必殺！！」

コスモカイザーがぐつと力を込め構える。

「流星一文字斬り！！」

一気に踏み出すとコスモカイザーはウルファーを高速の速さで斬った。

「はん！これが俗に言う一刀両断だぜ！」

そうマーズレッドが言うとウルファーは爆発した。

数日後。この前のように翔は河原を歩いていた。

「ああ、快晴はいいぜ！気持ちがいいな……」

そう言い翔はふと横を見ると少年サッカーの試合をしてるのを見た。

コウイチはボールを相手から取った。そしてドリブルでドンドンと相手のゴールに歩み寄る。

しかし、相手もそう簡単にはゴールを許さない。先に進ませないように前に現れる。

（抜けない……！！）

コウイチは周りを見回すがどうやら抜けないようだ。すると一人のフリーの少年が声をかける。

「コウイチ！パスだ！！」

コウイチは声の方を向くがすぐに下を向く。

（ぱ……パスをしないと……でも……）

「コウイチ！抜けないぞ！！」

（・・・そうだ・・・一人じゃ抜けない・・・一人じゃ勝てないんだ・・・お兄さんが言ってたじゃないか！）

コウイチは前を向くと上手くパスを回した。それにはチームの皆が驚いていた。

そして試合終了。

3 - 1で、コウイチの少年サッカーチームが勝利した。翔はコウイチの仲間との楽しそうな笑顔を見てなんだか暖かい気持ちになった。

4 t h s t a g e 友情の力 コスモカイザー現る！（後編）（後書き）

次回予告

コスモカイザーで、何とか巨大化したウルファーを倒せた。

今度は町の中で怪しい隕石商人が現れた。

子どもに綺麗な隕石を売るその男。その隕石を持った子どもは性格が凶暴になり、人を襲うようになる。

謎の隕石商人の巧妙な手口にシンが挑む！

次回 流星戦隊コスモマン5 t h s t a g e 謎の隕石！ シン
の名推理！

お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7221d/>

流星戦隊コスモマン

2010年10月11日03時11分発行